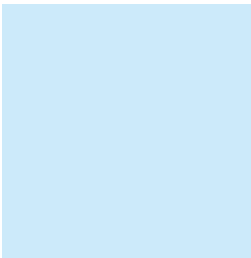
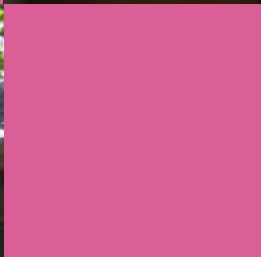
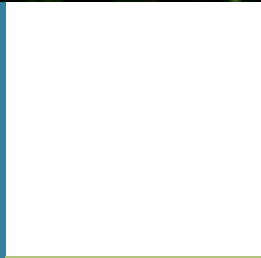
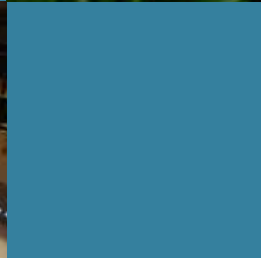
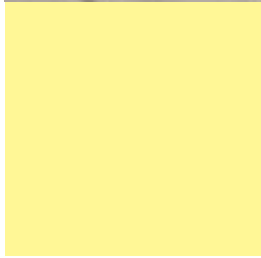


奈良
の
良い所

Na no Ra

日本文化の始まり・歴史にあふれる葛城市



P.2 : 相撲発祥の地、葛城市

P.3 : 時代を超える道「竹内街道」、中将餅

P.4-5 : 當麻寺 練供養会式 (聖衆来迎練供養会式)

P.6-7 : ハイキング
With 奈の良 二上山霊地巡り

第6号

相撲発祥の地 葛城市



いまや、日本の文化として世界的に知られている相撲ですが、詳しく知っている方は意外と少ないかもしれません。相撲の発祥地は、葛城市の當麻と言われています。

相撲についての資料館、葛城市相撲館「けはや座」は平成2年に開館しました。相撲館には、葛城市内の方はもちろん、海外からもツアー等で多くの方が訪れます。

相撲の歴史を語る相撲館

1階は、実物と同じ大きさの相撲の土俵があり、来場者が実際に上がることもできます。相撲に関する体験館のようなものは日本でも珍しく、実際に土俵の上に上がることができるのは非常に少ないとのこと。2階は、相撲の歴史の説明や、展示物などを見ることができます。相撲館では、担当職員の小池様、けはや相撲甚句会会長の吉村様にお話を伺いました。



実物と同じ大きさの相撲の土俵

最初に教えていただいたのが、葛城市と相撲との関係についてです。大和の国當麻にいた力自慢の當麻蹶速(たいまのけはや)は、力比べをする相手を探していました。その話を聞いた垂仁天皇が、出雲の国から呼び寄せたのが、野見宿禰(のみのすくね)でした。垂仁7年7月7日に行われた當麻蹶速と野見宿禰の対戦が、相撲の始まりだといわれています。當麻蹶速は、この試合で命を落としてしまいました。

それから長い歴史を経て、娯楽観戦のための相撲が一般化したのは、江戸時代と考えられています。相撲には、全部で88の技があるそうです。

けはや座には、當麻蹶速と野見宿禰の話から、現在の力士まで、相撲の歴史に関する絵や写真がたくさん展示されています。また、美しい化粧廻しや番付表など、力士の道具や資料もたくさん見ることができるので、面白いと思います。

相撲がこれほど長い間多くの人々に愛されていることを、相撲で命を落とした當麻蹶速も喜んでいると思います。私は、子供の頃、相撲に似た欧米のスポーツであるレスリングをやっていたこともあり、相撲の歴史や技にとっても興味があったので、大変面白かったです。



當麻蹶速と野見宿禰の対戦

相撲体験

相撲館では、定期的に行われている甚句(相撲についての語り)をはじめ、様々な催しが行われています。また、外国人である私が一番おすすめしたいのが、相撲体験です！事前に予約をすれば、誰でも体験することができ、外国人観光客にも大人気だそうです。18メートルある廻しを巻くか、もしくは力士の着ぐるみを着て、土俵の上で相撲の指導を受け、実際に相撲をとることができます。

私は、廻しと着ぐるみの両方を体験させていただきました！着ぐるみを着た時点で、みんなが笑って、盛り上がりました。恥ずかしくない方は、ぜひ廻しを巻いて体験してくださいね。力士の気分を最も味わうことができると思います。楽しみながら相撲について知ることができるので、相撲館に行ったら、ぜひ相撲体験をしてみてください。



廻しでの相撲体験



着ぐるみでの相撲体験

私も、ちょっとだけ力士になりきって、本番の土俵入りしながらに塩をまいて土俵を清めました。塩をまくのはとても難しく、最初はうまく飛ばせませんでした。最後に力を入れてやってみたら、やっと飛ばせました。塩をまくのにそんなに力が要るなんて知りませんでした！その後、四股を踏んで、模擬取り組みをしました。張り手など、皆さんも見たことがあるような技を体験しました。土俵は固い土でできていて、本物の力士は怪我也たくさんするのだらうと思いました。皆さんは、気を付けて体験してくださいね。

日本の国技である相撲について、学び、体験することができる葛城市相撲館「けはや座」に、皆さんぜひ訪れてみてください。

ハマドゥ ムルードゥ



板番付

詳しい情報はこちらをご覧ください。
葛城市相撲館「けはや座」案内ページ



<http://www.city.katsuragi.nara.jp/index.cfm/14,0,41.html>

時代を越える道

竹内街道

・最古の官道

道は人や物資が移動する通路です。道がなかったら物が山や川を越えて伝わることも、他の地域の人たちと交流することも、そして海を越えて海外の国の人と交流することもできません。道があるからこそ、他の地域や国の人と交流することができるのです。

竹内街道は大阪の堺市と葛城市を結ぶ26キロの道です。約1400年前、難波と飛鳥を結ぶ重要な道路として敷設された官道と重なることから、日本最古の官道とされています。あるときは遣隋使を見送った道であり、飛鳥時代には外国の使節がここを通過して飛鳥京に向かったと考えられています。この道はまるで古代日本と外国との交流の道とも言えます。

・司馬遼太郎の思い出の道

日本で有名な歴史小説家『司馬遼太郎』。司馬遼太郎は幼い頃、ここ葛城で過ごしたことがあるそうです。司馬遼太郎は紀行文『街道をゆく』で竹内街道を「唯一の国宝に指定されるべき道」と話しています。

そして同書で、ここでの思い出も語っています。内容は司馬遼太郎がまだ若かった時、坂の上から自転車でころがりおりに来た、赤いセーターを着た年上とみられる女性とすれ違います。その時、坂を登っていた司馬遼太郎は彼女が自分にキラッと微笑んだと思ひ彼女をふりかえりますが、彼女は坂の下の家並みに消えた後でした。ほんの一瞬の出来事だったかもしれませんが、司馬遼太郎にとっては忘れられない思い出となったようです。

道はただ、人や物が通行するだけではなく、人が行き交う中で思い出が生まれる場所でもあります。

・竹内街道の現在

近鉄南大阪線の「磐城駅」の改札口から出て、左を見ると「竹内街道」と書かれた標識が見えます。それに従って歩いて行くと静かな町の中に入っていきます。そのまま西に向かってずっと歩くと、長くて緩やかな坂が続きます。竹内街道は時代につれてその姿を変えてきました。しかし重要な道ということには変わりなく、江戸時代には伊勢参りの旅人が休める宿もありました。その痕跡が今も残っていて、江戸時代の宿から現代に至るいろいろな時代の家が一つにとけこんで並んでいます。町には高いビルがないので、二上山の風景を見ながら歩くのも一つの楽しみです。

時代が変わり周りの風景が変わっても、道は残りました。国の外交の道になったり、ある人の思い出の道になったり、そして今は近代と現在が共存している町の道になって私たちを迎えてくれます。日本の最古の官道「竹内街道」を歩いて、日本の昔と今を感じてみてはいかがでしょうか？

李 鎬善

竹内街道の地図



-参考文献 司馬遼太郎『街道をゆく1』（朝日文庫）

名菓 中将餅

葛城では、昔からあんつけヨモギ餅が愛されてきたようです。今回、当麻寺駅前にあり、店内でもあんつけ餅が食べられる「中将堂」に立ち寄りました。

「中将堂」の中将餅は、柔らかいヨモギ餅の上にボタンの花びらのようにあんこをのせたお餅です。ヨモギ独特の香りと甘みを抑えたあんこの絶妙なバランス、そしてようじだけですと切りわけることができるお餅の柔らかさは、絶品です。

店内に入ると、カウンター越しに中将餅を作っている光景が目に入ります。店内と中庭にはイートインスペースもあり、旅路で疲れた足を休ませることもできます。「中将餅と煎茶のセット」は、葛城で採れたヨモギと奈良県産の餅米を使用した中将餅2つと煎茶のセットです。煎茶は奈良県産のお茶「大和茶」を使用しています。まさに、奈良の自然の恵みを味わえるセットとも言えます。

当麻寺駅のすぐ目の前にある中将堂に立ち寄って、日本ならではのティータイムを楽しむのはいかがでしょうか。



営業時間

- ・9:00 - 18:00
- ・売切れ次第終了

休業期間

- ・7月
- ・8月中旬から8月31日
- ・12月31日から1月初旬

詳しくはホームページをご覧ください。



<http://www.chujodo.com/>
(日本語のみ)



當麻寺

練供養会式 (聖衆来迎練供養会式)

1 練供養会式 (聖衆来迎練供養会式)

近鉄南大阪線の当麻寺駅で電車を降りると、5月の暑い日なのに大勢の人が坂道を上っており、その様子から今日は普段とは違う特別な日だとすぐに分かりました。當麻寺の境内に入ると、本堂と境内の南側にある娑婆堂しゃぼどうの間に長さ100メートル以上ある橋(来迎橋)がかけられ、既に数百人の人々が式の始まりを待っています。それだけでも目を疑うような光景ですが、本番はこれからです。なぜなら、今日は千年以上続けられてきたと云われる、仏教の信仰を鮮やかに再現する練供養会式(正式には聖衆来迎練供養会式)の日だからです。練供養会式は、本堂を極楽に、娑婆堂を人間の世界に喩え、二十五菩薩による「来迎」(つまり臨終の際に阿弥陀如来や菩薩が迎えに来る)という概念を具体化した法要です。



100メートル以上もある「来迎橋」

2

行事当日16時ごろ、それまで静まっていた境内に突然、鈴、笛、法螺貝の音色が響きます。本堂にかかっている来迎橋の方に参拝者が目を向けると、お稚児さんの行列が娑婆堂の方へ渡り始める様子が見られます。次に、當麻寺の浄土宗寺院の僧侶が続き、境内は荘厳な雰囲気になります。改めてこの日の宗教的な行事としての重要性を感じずにはられません。いつの間にか雅楽の音色が僧侶の読経に変わり、やがて、面を被った菩薩の方々が本堂から娑婆堂に向かって歩き始めます。鮮やかな衣装を身につけており、何か不思議な、神秘的な印象を受けます。金色の菩薩面を被った二十五菩薩が渡り始めると、なおさらその印象が強く、ゆっくりと娑婆堂に向かって歩く様子はまるで夢のようで、来迎という概念がそのまま再現されているようです。



行列が本堂に戻ってくる様子

3

最後に来る観音菩薩が蓮台を持ち、それを左右にゆっくりと掲げながら娑婆堂に向かっていきます。娑婆堂で仏の姿になった中将姫の像を受取った観音菩薩に続いて二十五菩薩は本堂へ戻っていき、夕暮れの境内に読経が響き渡る中、行事が終わります。

當麻寺は612年に創建された古いお寺です。宗派はもともと南都六宗の一つ、三論宗を奉じていましたが、現在は真言宗と浄土宗の二宗派となっています。現在の形の練供養会式は鎌倉時代まで遡ると言われていますが、文献によると千年以上前から行われていたとも云われています。當麻寺の練供養会式は大変歴史が深く、全国的に広まったこの練供養会式という法要の発祥の地として、大きな意味を持つと言えるでしょう。

4

練供養会式は毎年5月14日、中将姫の命日に行われます（16時頃から、入場無料）。中将姫は藤原豊成の娘で、16歳で當麻寺に入り、阿弥陀如来の極楽浄土を表した當麻曼荼羅を一晚のうちに織ったとされています。この當麻曼荼羅はその後現在に至るまで同寺の本尊として祀られ続けています。そして、中将姫は29歳の時に二十五菩薩の来迎を受け、極楽往生を遂げたと言われています。當麻寺の練供養会式は、古くは浄土教の信仰を広く知ってもらおうべく、この来迎の様子を菩薩面や衣装などによって再現したものです。仏教のことをよく知らない外国人（特に欧米人）の観点からすると、仏教の信仰を具体的な形で再現した大変珍しい行事で、身近に仏教の本質、そして日本の文化にも触れ合える機会といえ、非常に意味深いものです。



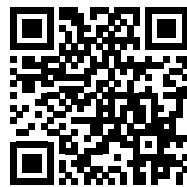
地藏菩薩

6

當麻寺で、練供養会式を見学し、目と耳で来迎の様子を感じ取ってはいかがでしょうか。なお、當麻寺では練供養会式や上記で触れた當麻曼荼羅以外にも、双塔といわれる東西両塔や春の桜や4月下旬に満開を迎える牡丹、夏の蓮や秋の紅葉など、見所がたくさんあります。ぜひ一度、訪れてみてください。

ヒートン トマス

詳しい情報はこちらのホームページをご覧ください。



當麻寺（日本語のみ）

<http://tamadera-gonenin.or.jp>

5

練供養会式は毎年参拝者の数が多く、海外メディアにも取材されることもあります。式は地域の菩薩講と云われる方々によって護られているそうです。練供養会式に出る方々のほとんどが地域の出身で、當麻寺護念院の住職様によると、練供養会式が自分たちの生活の一部になっているそうです。観音菩薩、勢至菩薩、普賢菩薩以外の菩薩役はくじ引きで決められ、行事当日まで会合を重ね準備をされるそうです。練供養会式は地域の方々にとって自分たちの信仰を表現し、信仰を確かめる重要な意味を持つ行事であると住職様はおっしゃいました。ここから地域の方々の深い信仰心を感じることができます。



菩薩面



雄岳と雌岳の連続する二峰から成る二上山は、大和盆地の西南部にある金剛・葛城山系の最北端にあり、独自の美しさが漂っています。二上山周辺は、山麓に鎮まる神社、當麻山口神社や、日本最古の石仏を有する石光寺があり、共に歴史が深く、神仏の靈験あらたかなスポットと言えます。今回は、これらの霊地をめぐりながら、二上山をハイキングしましょう。

當麻山口神社

二上山の麓に入ると、万物が静まり返っていました。神域と人間が住む俗界を分ける結界と言われる石の大鳥居が入口に佇んでいます。鳥居をくぐると、そこは神域です。

神社の本殿で高津禰宜夫妻と御祖母様が私たちの訪れを待っていただきました。なぜ鳥居が向いている方向が神社の参拝道ではなく、二上山の方向なのでしょう？高津禰宜によると、それは冤罪に蒙られ、若くして亡くなった大津皇子が二上山に埋葬されたため、大津皇子を祀っているのではないかと推測されているとのことです。五木寛之の『百寺巡礼』では、「大和の人々は、こちら側を現世、西の河内の方を浄土」と書かれています。二上山は生と死を分ける結界と言えます。



高津禰宜と第二の鳥居

■神様

拝殿に祀られている神様は、大山祇命、邇邇芸命と木花之佐久夜毘売の夫婦です。一番尊いのは、拝殿に向かって右側にある山の精霊を支配する大山祇命であり、この神社に最初に祀られた神様とされています。一夜で妊娠して夫の邇邇芸命に自分の子供ではないのではないかと疑われ、身の潔白を示すために、産屋に火を放ってその中で三人の子供を産んだ、という「古事記」に登場する邇邇芸命と木花之佐久夜毘売の夫婦も、いつの間にか、祀られるようになりました。縁結び、夫婦円満、子育てのご利益があるとされています。雲の上の神様たちがドラマみたいに葛藤したり、人間臭い部分を持っていたと思うと、親近感がわきますね。

では、神様はどこにいるのか、と多くの外国人の方は思うでしょう。実は、神社の境内で神様の姿が見えるわけではなく、心で感じとります。日本の神道では、すべてのものには神様が存在している

と考えています。山、岩、川などの大自然こそ御神体であり、神社は、古代の人について考えさせられ、八百万と言われる神様への畏敬の念が湧いてくる場所と言えるでしょう。當麻山口神社は、厳かに立ち並ぶ老杉、奥深い森など、スピリチュアルなものがいっぱいです。拝殿の前で拍手を打ちますと、晴々しい音が境内に響きます。拍手には厄除けと神様を呼ぶという意味があるそうです。

■お祭り

高津禰宜の紹介によると、901年には、延喜式神名帳（※「官社」に指定されていた全国の神社一覧）にこの神社が式内大社の社格をもち、朝廷から奉納をうけていたと記録されています。年に4回の祭りがあり、4月23日の御田植祭は、江戸時代から始まり、豊作を祈願するために行われてきました。祝詞をあげた後、昔の農耕の様子をまねた所作を行います。牛のマントを被り、田植えしたり、神様への供え物であるお餅をまいたりします。それは神様に供えたものと同じものを食べて神様の気をもらう、神人共食と呼ばれる神道の習わしです。地元の子供たちは、ハイキングした後、この神社に集まり、祭りを楽しむそうです。小さい頃から、自然への崇拝が日本人の心に浸透してきたと見られます。

二上山ハイキングをスタートする前に、當麻山口神社に立ち寄って、厳かな雰囲気を感じ、心身を整えてはいかががでしょうか。



當麻山口神社御田植祭の様子



當麻山口神社
<http://www.taimayamaguchi-jinja.org/>

詳しい情報はこちらのホームページをご覧ください。

二上山の麓の石光寺、不思議な魅力がいっぱい

■中将姫とのゆかり

大津皇子のほか、二上山にまつわるもう一人の人物として中将姫がいます。聖武天皇の時代に當麻寺で出家をした中将姫が、「蓮の茎から糸を取り出し石光寺の靈験あらたかな井戸水で清めよ」という仏様の示現に従い、井戸のそばの桜の木にかけて干したところ、乾くに従って五色に染まったという伝説があります。その井戸は現在、石光寺にあります。中将姫がそれらの糸を當麻寺に持ち帰り、一夜にして織り上げたのが、當麻曼荼羅です。石光寺の宗派浄土宗は、法然上人が中国の善導大師の教えに従い、鎌倉時代に開いた日本の仏教宗派です。外国人にあまり知られていない當麻曼荼羅ですが、極楽浄土の教えが壮麗に描かれている絵なのです。作家折口信夫の小説『死者の書』は中将姫の物語を取り上げ、夕陽が沈むところに浄土があるという古代日本人の観念を語っています。信仰の篤い中将姫は二上山の夕日を見て、仏の幻を感じているように突然と姿を消し、二上山へ向かうと小説に書かれています。古代日本人の信仰は、ここから窺い知れるでしょう。



中将姫像と井戸

■最古の石仏

石光寺には日本最古の石仏があります。石仏の誕生について「當麻曼荼羅縁起絵巻」では、夜になると不思議な光が今の石光寺があるあたりから放たれており、時の天皇である天智天皇（668年即位）がそこを掘らせたところ、仏の形をした石がでてきたそうです。その後、この石を弥勒如来として彫りお堂を建てて祀られたと述べられています。また、住職様によると、考古学の観点からは朝鮮半島で起きた白村江の戦い（663年）で敗れた百済の人々が日本に移り住み、二上山の石を使って彫ったと考えられているそうです。いずれにしても、いつしか石仏は人知れず消えてしまったそうです。

その後、1991年4月に同寺のお堂の建て替えに伴い発掘調査を行ったところ、仏頭と胴体が出土し、一つの石を丸彫りにした石仏はこれまでに例がなかったことから、日本最古の石仏として全国的に報道されました。

何度か火災にあい、彫り直された石仏の顔はどこか親しみ深く、住職はその顔を見ていると心がおだやかになるとおっしゃいます。約1320年の時を超えて私たちの目に触れるようになった、日本最古の石仏をぜひご覧下さい。



日本最古の石仏

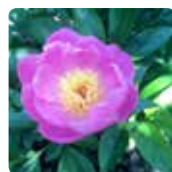
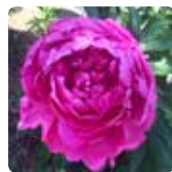


■お花

伝説、石仏以外に、もう一つの見どころと言えば、花です。石光寺は、牡丹寺とも言われるほどで、2000株300種類のポタン（春ポタンの見頃：4月下旬；寒ポタンの見頃：12月初旬～中旬）と、1000株100種類のアメリカシャクヤク（見頃：5月初旬～中旬）が植えられています。留学僧として唐に渡った弘法大師が中国からポタンを漢方薬として持ち帰ったことをきっかけに、古代のお寺ではその当時から薬種ポタンが植えられるようになりました。境内のポタンの剪定や植え付け、土作り、肥料は、ご住職一人で行われています。こんなに綺麗に咲くポタンを植えた秘訣について聞いてみると、ご住職はこのように答えてくれました。「懸命に育てても次々と枯れてしまい、心の苦痛を感じていたが、来年はまた違う種類が植えられるんだと心の切り替えの大切さを学んだ。これはまさに仏教の不断行の教えでしょう。」私達の日常にも活かすことができる奥深い話ですね。

二上山ハイキングをする前に、不思議なところがいっぱいの石光寺をぜひ訪れて頂き、伝説の井戸、最古の石仏、綺麗な花を巡りましょう。

張 敏



取材時（5月中旬）にはたくさんのシャクヤクが咲き乱れていました



石光寺

<http://sekkouji.or.jp/>

詳しい情報はこちらのホームページをご覧ください。

『奈の良』第6号の取材先：葛城市

今回は仏教の信仰を鮮やかに再現した行事を見たり、相撲の発祥地を記念する相撲館での相撲体験や、日本最古の官道や二上山近辺の寺社を訪れて、日本の歴史を身近に感じることができる葛城市を取材しました。いろんな文化に触れ合える魅力あふれる街でした。

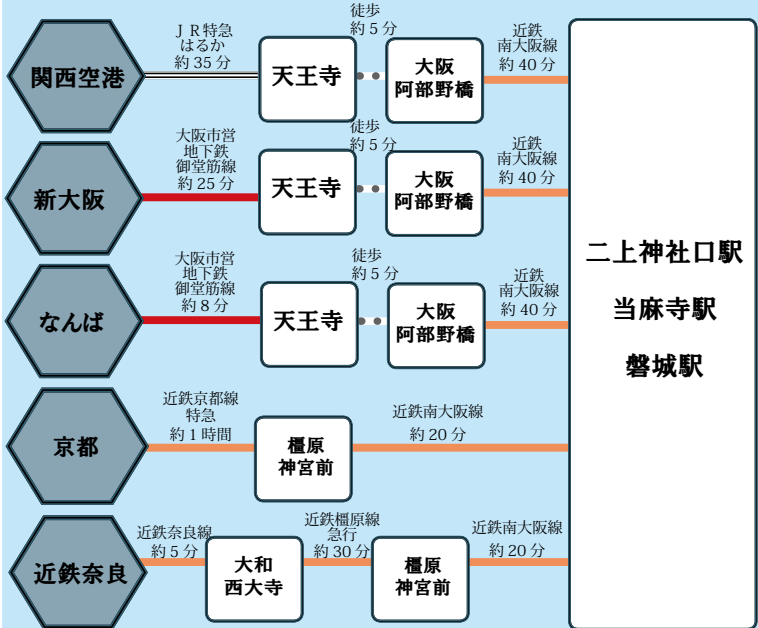
今回取材した場所



- P.2 相撲の発祥地、葛城市 : ①相撲館「けはや座」
- P.3 竹内街道、中将餅 : ②竹内街道 ③中将堂
- P.4-5 当麻寺 練供養会式 : ④当麻寺
- P.6-7 二上山霊地めぐり : ⑤石光寺 ⑥当麻山口神社
⑦祐泉寺 ⑧雄岳
⑨雌岳

アクセス

電車を利用する場合



車を利用する場合

関西空港から約 50 分
大阪市内から約 40 分

- ・南阪奈道路、葛城 I C から下車して約 5 分
- ・西名阪自動車道路、香芝 I C から下車、国道 168 号線を經由して約 20 分
- ・西名阪自動車道路、柏原 I C から下車、国道 165 号線を經由して約 20 分

「奈の良」とは

こんにちは。

私たちは奈良県国際課に勤務する国際交流員です。奈良県と海外の交流を深める架け橋となるべく、日々、国際交流業務に従事しています。

『奈の良』は、外国人の目線で見えた奈良県の魅力を県民の方々や外国から来られたお客様に紹介するため、私たちが奈良県で見つけた魅力や面白いことについて自ら取材し、記事にしたものです。本誌が奈良県に興味を持つきっかけや外国人が感じる奈良の魅力を発掘する手がかりとなれば嬉しく思います。

奈良県国際交流員一同



編集後記

今回の取材にあたり御協力いただいた相撲館「けはや座」、石光寺、当麻寺、当麻山口神社、中将堂をはじめ、葛城市の方々にお礼申し上げます。

『奈の良』

発行元：奈良県知事公室国際課

発行：平成28年8月

本誌に関するご意見、ご質問等はこちらへご連絡ください。

〒630-8501 奈良市登大路町30 奈良県知事公室国際課

TEL：0742-27-8477

FAX：0742-22-1260